活　　動

昭和 37（1962）年度～ 39（1964）年度について

松尾武久

昭和 37（1962）年 5 月 12 日付けで、松本山岳部と伊那山岳部が合併し、伊那松本山岳部が発足した。この合併は穂高岳吊り尾根での遭難事故の反省から生まれてきたといってもいいと思う。遭難をじかに経験した山田和彦、後藤紀彦、葛西正美の諸氏が強力なリーダーシップを発揮し、二度と遭難を起こさない組織のしっかりした山岳部を目指したのである。また、その 35 年に入部したメンバーが 3 年部員となり、松本山岳部に 2 名、伊那山岳部に 9 名となって中堅となり、より強い、高度な山行を目指せる体制になってきたこと、遭難後の 36 年に入部した 2 年部員が、松本山岳部に 2 名、伊那山岳部に 7 名と他大学山岳部に負けない陣容が固まってきたことがベースにあった。

伊那山岳部のメンバーは、教養部時代に松本山岳部に入部し、共に合宿を経験してきているので、充実した山行が行えることに期待が膨らんでいる一方、伊那と松本という距離のギャップからくる情報の共有化や行動の一体化等に問題が残るとの懸念も強く指摘されていた。

この年の新人は 28 名で、新人合宿は A、B、C、D、の 4 パーティーを編成する総勢 51 名の大合宿で行われた。また、夏山合宿は涸沢定着合宿と剱岳定着合宿と二つで行わざるを得ず、懸念克服のために伊那、松本間での意見交換や合宿準備に上級生の積極的な参画が求められている状況であった。

37 年度チーフリーダー（以下 CL）西郡光昭はその前期山行報告書の中で「僅か半年のしかも遅々たる部の動きの中にも、我々にとっては種々の大きな問題が含まれている。これらの問題の全部が伊那と松本の合併の際に充分指摘され、対策も考えられ、新しい意気込みでスタートした筈であるにも拘らず、殆ど解決を見ないまま、後半期を迎えるに至った事実を考えるとき、ズク無し現役では済まされない大きな問題であると思う」と指摘し、距離のギャップからくる情報の共有化や行動の一体化等の問題が依然として残っていることを語っている。

冬山合宿も白馬岳合宿と常念岳合宿の二箇所で行われた。常念隊のリーダーの寺田雅治はその報告書の中で「いつまでも連絡の不徹底という難問題を感じ、未だに克服できない現状である。総会のたびに指摘される下での準備への意欲欠如云々……。これらの反省を春山に向け意欲ある抜かりない準備に持っていきたいものだ」と述べている。

この間、総会のときに、山岳技術や山岳気象を一から勉強しようということで、研究発表を実施し、絶えず部のレベルアップを図ってきた。

・気象に関するもの
　天気図の作り方、気象のしおり（夏山天気について）、春山の気象、冬山気象概論、雪崩
・登山技術に関するもの
　計画の立て方（積雪期における）、冬山合宿新人指導要領、冬山個人装備について、凍傷と凍死について、雪洞とイグルー、サマーテント実施要領

等などであった。

春山は、我が山岳部はじまって最初の大規模な極地法登山を実行することになった。栂池から白馬岳・唐松岳・五竜岳を経て鹿島槍ケ岳を登頂しようというものであった。キャンプを 6 箇所設置することになり、その間の連絡や物資の移動、周到な準備が必要であり、これまで問題視されていた全員参加なくして成り立たないプロジェクトであった。さらに不帰ノ険や五竜岳・鹿島槍ケ岳間の岩尾根のルート設定等技術的な力も試される合宿であった。

天候にも恵まれ、ほぼ完全な形で成功に終わり、集大成の春山で、やっと懸案事項を克服し、一つの山岳部になったと全員が感じた合宿であった。

合併以来2年目の昭和38（1963）年度は、さらにその絆を強くし、より一層高水準な山行を目指すことになった。

昭和37年度の春山の鹿島槍ケ岳極地法が成功裡に終わったあと、我々としては20数名の大部隊で、一合宿を実行することに対して反省が生まれてきて、京都大学山岳部のような分散形式の合宿を、大幅に取り入れ部員各自の自主性を尊重し、各人の技術・体力・意欲に応じた山行を実行し、広く山に対する経験を積もうとする方向に向かったのであった。

また、愛知大学の薬師岳の遭難以後、世論は大学山岳部の遭難には大変厳しくなってきており、遭難発生は我々が最大の努力を払っても阻止しなければならない一大目標でもあった。

昭和38年度は、以上の点を踏まえ、大幅な分散形式を取ることになった。しかし、新人合宿と冬山・春山合宿は部全体の合宿として実行することになった。

一年ごとで構成人員が変更する大学山岳部の宿命として、新人合宿はその年の気持を引き締めるためにも不可欠の合宿であると考えられる。そのため今年度も穂高岳岳沢にて実施された。

夏山では、雪上訓練の強化と岩登り技術を磨く目的から剱岳定着合宿、OB・旧人対象に奥又白岩登り合宿、体力強化のため3つの縦走合宿を実施することになった。

この年の剱岳は例年に比べ雪が少なく、非常に危険な状態であり事故が続いていた。我が部でも、7月20日に八峰マイナーピークで一名が滑落したが、幸い軽症で済み大事故にならなかった。この事故で我が部の遭難に対する認識の甘さが判明し、合宿の運営方法、リーダーのメンバーへの適切な指示の徹底、とっさの判断力の養成、救急方法の勉強が絶対必要であるとの認識が各部員の心の中に染み渡ったのであった。

縦走形式では、それぞれ小パーティーであったため、上級生・下級生の区別無くことに当たらねばならないため、相互の理解も深まり当初の目標を達成できたことは収穫であった。

秋山には、岩登り中心の涸沢定着合宿、夏の縦走不参加者を対象とした縦走合宿、来るべき冬山合宿の駒ケ岳摩利支天峰中央壁のルート偵察合宿の3合宿を計画した。

穂高岳での岩登り合宿は、奥又白とハンで押したような我が部も、幅広く経験を積むため、滝谷にも足を伸ばす必要があった。勝手知った奥又白とは異なり、ルートも勉強の必要があり、また天候の変わりの速い北面の滝谷は気の許せない岩登りを必要とするため、自分たちの実力把握には良い合宿であった。

冬山合宿は、新しい形式が試みられ、北沢定着で摩利支天峰のアタックの後、2パーティーに分かれ、一隊は早川尾根を夜叉神峠まで、もう一隊は、小太郎尾根より北岳を経て池山尾根を下り夜叉神峠までの計画であった。

摩利支天峰のアタックは、中央壁と南西稜の2パーティーと決定し、ビバークの予定で出発したが、積雪が思ったより少なく、快晴無風の絶好のコンディションであったため、両パーティーとも、その日の夜にテントに帰着し、ホットすると共に何か拍子抜けしてしまった。その後の縦走は、稜線にでると快晴であるのに、強風に悩まされ、沈殿を余儀なくされてしまい、当初の思惑と違ってこちらの方がシゴかれてしまった。

南アルプスは北アルプスに比べ天候は安定しているが、北アルプスに雪を降らした季節風がモロにぶち当たるため、風による影響が多く、凍傷等を生じることが多いようである。このあたりのことを計算に入れた合宿日程を作成せねばならないとの反省を我々に与えてくれた。

春山合宿は、久方ぶりに穂高で実施することになった。前穂高岳東壁のB・Aフェースの積雪期の登攀を実施しようとの計画であった。残雪期や夏・秋には嫌というほど登っている東壁も、我々

の部では誰も登っていなかった。我々としては、A沢の状態が良いときに下り、V字雪渓をトラバースして、Bフェースの取り付きに達するルートを考えた。滝谷方式を取った訳である。この東壁のアタック隊の他に、前穂高岳より奥穂高岳を経て西穂高岳へ周遊する縦走隊をさらに出す予定であった。

登路としては明神岳5峰の南西尾根を使用し、アタックキャンプはA沢の源頭に置くことになった。

この合宿は、悪天候に悩まされ続けた合宿であった。3月11日から18日までの8日間は連日の降雪で、A沢の状態は極度に悪く、ラッセルは胸まであり危険な状態であったので、東壁アタックは中止し、捲土重来を期することになった。縦走隊も、穂高吊り尾根の予期しなかったものすごいラッセルに悩まされた。しかも岳沢側は雪崩の危険性が高いためトラバースが出来ず、リッジ通しに行ったため時間がかかり、奥穂高岳の頂上に着いたのは夕方であり、その後の天気の見通しが悪いため、結局、白出しのコルから涸沢を経て上高地へ帰ってくることになってしまった。

合宿は失敗に終わったが、この判断は結果的には良かった。というのはこの時期に各地で雪崩による遭難事故が相次ぎ、我々も下山のとき、釜トンネルの上高地側で雪崩の捜索隊に出会ったときは、正直いって事故もなく下山できることが、失敗したことよりも嬉しく感じたことであった。春山の天候に対する認識が甘かったが、連日の悪天候に、あらためて自然の厳しさを身にしみて感じ、また我々はもっともっと謙虚に自然を見つめなければならないことを痛感したのであった。

今年度は、成果を問う春山では天候に恵まれず、失敗に終わってしまったが、分散形式の良いところを取り入れ、各部員が個人山行を数多く実行したことは、部の将来において明るい材料を提供してくれた。しかしその反面、大事故には結びつかなかったが、滑落事故が多発し気の緩みが感じられ、分散形式とは自由放任の個人的色彩の濃い山行と受け取られがちであったため、部としての一貫性を貫く必要性が出てきたことであった。山岳部は山へ登りたい人間の集団であるが、そこに組織としての部が存在する以上、部員個人はそれに基本的には拘束されるはずであり、指導方針、運営方針を明確化して、部のまとまりを維持していかねばならない。我々はまだまだ学ぶべきことが多くある。リーダーとして、メンバーとして絶えず技術アップを図り、体力を養成し、的確な判断力を付けられるようさらに努力する必要がある。これらのどれをとっても今年度はうまくいかなかったが、来年度こそはこれらの課題を克服したいものである。

昭和37年頃より我が部においては、分散形式の登山合宿方法の検討が始められ、徐々にではあるが実行に移され成果もあがりつつあった。

昭和39（1964）年度は、この流れをさらに定着させるべく、部員個人の自発的な自主性のある山行をどしどし実行させる方針であった。また、一方では山岳部としての連帯感、メンバーシップの涵養には部全体の山行合宿も有効であるとの判断から、新人合宿、秋山合宿、それに冬山・春山合宿の計4合宿を従来の方式で全員の合宿として実行することになった。

我が部は、伊那と松本と離れたところに学部があるため、その間の密なる連絡は、部の発展には不可欠の条件であった。昭和37年度に合併して以来叫ばれ続けてきたこのテーマは、この一年間の改善の最大目標であった。これについては、月一回の総会とその前後のリーダー会、体力増強のための合同トレーニングの実施等により少しずつ解消され、距離のハンディは徐々に無くなる方向に向かったのは、ひとつの成果であったと思う。

夏山の奥又白岩登り合宿において、8月9日偵察、10日、前穂岳東壁Dフェースに、前穂岳の頂上まで直結する新ルートを開拓することに成功した。松本高校時代からこの奥又白をフランチャイズとしてきた我が山岳部がやっとその実力を示せた画期的な出来事であった。登攀者は片岡 格

と小谷雅宣であった。

信州大学山岳会（以下、SAC）の統合問題も、伊那松本、長野、上田の各山岳部ともいま一つの機運が無かったが、この年の1月の上田山岳部の剱岳小窓尾根における滑落事故、8月、長野山岳部の剱岳西面池ノ谷ドーム稜における遭難を経験し、遅まきながら遭難対策をきっかけに、一気に統合の方向へと部員の意識が高まり、11月乗鞍岳信大ヒュッテにおいて真剣な討議がなされ、新しい一歩を踏み出したのであった。

あいついだ遭難は、同じSACの構成員である我々にも影響を与えずにおかなかった。ここで我が部に遭難があればSACは世間の批判、大学当局の批判を受け、壊滅的な打撃を受けることは必至であった。それ故この年の秋山合宿は、ルートも知り、地形も知り尽くしている前穂高岳奥又白から離れ、部員各自の技術を認識し、山そのものを見直すべく、部創立後初めての八ケ岳稲子岳東壁、南壁で実施された。我々はこの合宿を通じて、自分たちの岩登りに対する技術を各自が反省すると同時に、多くの山々を知るべきだとの認識が高まり、登山方法、それに合宿の対象の山々を見直すようになったのはひとつの成果であった。

冬山合宿は、多様な登山方法の習得の意味から、鹿島槍ケ岳への集中登山の形で実行された。小パーティーにおける雪山合宿で、部員個人の実力をフルに発揮させようとの目的であった。我々はこの合宿で得た体験を、続く春山合宿の北鎌尾根から西穂高岳までの縦走と横尾尾根のセミポーラーによるサポート隊の行動に結びつけようとする準備段階でもあった。

そして、一年の成果を問う春山には、我々は北鎌尾根より西穂高岳までの縦走を取り上げたのであった。このルートは我が部としては、昭和35年度春山に北鎌尾根から前穂高岳までの縦走が試みられ、成功まであとわずかといった段階で、吊り尾根にて遭難が発生し、涙を飲むといった経緯があるルートであり、我が部の実力からみても最高の技術を要する合宿になることが予想された。

積雪期の穂高には、昭和38年度にも明神岳五峰から、前穂高岳、奥穂高岳のアタックを成功させているので、まったく遠ざかっているわけではないが、信州に居を構える我が部としては、北鎌尾根から西穂高岳の縦走はいつか誰かが手を付けるルートでもあった。そして、好天にも恵まれ、当合宿は成功裡に終わり、昭和38年度春山、昭和39年度春山と2年間で、穂高山群の山々を踏破することが出来たのである。

この一年間は、全部員の合宿に対する意識が高まり、特に4年部員以上の部員が、自発的に参加したことにより、レベルの高い山行が出来た年でもあった。ともすれば信州の山々にだけしか足跡を残そうとしない我が部からも、北は北海道の山々、東北、近畿の山々と幅広く対象を求めるようになった。しかしその間、大学山岳部の使命でもある山に対する学術的な研究がおろそかにされ、その方面に今一つの突っ込みが足りなかったのは、今後の課題として残ってしまったのであった。

この年の反省点としては、記録には以下のとおり記されている。

①分散形式をとった場合、部全体の基本的な技術指導がしっかりしていないと、どうしても妥協的な安易に流れる山行になってしまう傾向があることから、部としての基本線を明確にしなければならないこと.

②山行報告がしっかりと記録されなかったことと、部としての記録をまとめ得なかったこと.

③OB会との連絡が、昨年と同様、表面的なもので終わってしまったこと．これは今の部の発展には、部員のレベルアップもさることながら、山登りという息の長いスポーツに対する指導には、やはりOBの方々の力が必要だと考えるからである.

この3年間で、伊那松本山岳部の志向するところ、行動基準、合宿形式等が固まったと感じている。昭和35年度の穂高岳吊り尾根の遭難事故の反省に立ち、その綱領を達成すべく努力してきたこと

が、具体的な形に現われてきた3年間であった。

昭和40（1965）年度～43（1968）年度について

扇能　清

昭和38年度からの分散山行の流れが定着し、基本方針として大きく変わることがなかった。

新人、岩登り定着、冬山の各合宿を除いて、無雪期には少人数の数多い山行が行われた。しかし、春山となると、昭和40年度と昭和43年度には複数の計画も予定されていたが、直前に中止されることになり、結果的には一つの山行が行われるに留まった。

この頃、新人にはオールラウンドな山行を目標に知識、基礎技術の習得のため以下のような山行が計画されていた。

新人合宿	5月連休	雪上訓練
夏山	10日以上の縦走	体力養成
秋山	1週間	岩登り技術
冬山	15日間	ラッセルワーク 雪山生活技術
春山	25日間	アイゼンワーク 雪山生活技術

他に6月には雪上訓練補充山行、岩トレがあり、秋には冬山や春山の偵察を兼ねた雪上訓練の短期の山行が行われていた。また、8月中旬に上級生、OBを対象にした岩登り、奥又白合宿が10日間あり、新人の参加は自由とされていた。

上級生には、これらの山行を通して新人の指導に当たり各自の技術の向上、判断力、リーダーシップの習得にあたることが求められた。

昭和41年度CL新谷剛の時に、部員は4年次終了までに「積雪期の穂高の稜線を歩けること」という明確な目標が設定された。国内の一級の困難なルートである穂高の稜線を、適切な判断力の元に20～30kgの荷物を担いで、安全に余裕を持って通過できる総合力を内容とするものである。そして、目標に向かって、困難な岩壁のルートも重荷を担いだ縦走が基本であり、積雪期の難しい稜線も後立山や南アの雪山での地道な山行の延長線上にあるとの考えで実践されていた。

昭和45年度の冬山合宿で、2年部員を含むパーティーで難渋することなく穂高の稜線を往き来できた時、間違っていなかったと思えた。もっとも、山は天候や積雪状態によって大きく変化するが、概ね好天に恵まれたとは言え、他パーティーのトレースやフィクスが無い中での行動であった。

昭和40年度は、CL宮崎敏孝（4年部員）、5年部員以上8名、4年部員6名、3年部員2名、2年部員2名で、13名の新人が入り、5月の連休に穂高岳岳沢で新人合宿が行われたが、天候が悪く充分な雪上訓練も行えずに終わった。各地で雪崩や滑落、疲労凍死による大量遭難が発生し、マスコミで「連休遭難」と後々まで話題にされる年となった。

伊那と松本の合同の部会に当たる総会は、月に一回伊那と松本で交互に開くことを基本に、岩トレや各山行のミーティングを通じて、新人と上級生部員の交流の維持が図られていた。松本には6年部員1名、4年部員3名、2年部員1名がいて、新人の指導に当たっていたが、新人も冬山前には農学部と工学部の部員だけになり、来年度の中堅部員の不足が心配された。

昭和41年度は、CL新谷剛（5年部員）、5年部員以上10名、4年部員2名、3年部員2名、2年部員6名の構成で、新谷剛の強力なリーダーシップのもと部が運営された。

教養部統合の年で、入学式が4月後半となったため、新人合宿は例年より1ヶ月遅い5月末から6月初めとした。5月連休には、2年部員以上の10名で鹿島槍ケ岳強化合宿を行い、大冷沢源流部の尾根を全て登りつくし、2～3年部員にとっては強化合宿の名にふさわしいものとなった。

新人は伊那松本14名を含めてSACで30名が入部した。SAC各山岳部は昨年度までと同様、

別々に独立して部活動を行うこととしていたが、教養部統合という良い機会でもあり、新人を各部に分けるのも不自然であるとの意見が出て、合同の新人合宿が実施された。

総勢65名に及ぶ大合宿は、マイナス面も多々予想されるがプラス面を信じての合同合宿で、この多人数の雪上訓練が出来る場所は涸沢以外では考えられず、横尾をBCとして実施された。上級生にとっては、新人の指導に追われる合宿となってしまったが、5月末の涸沢は人も少なく、雪面も固く1～2年部員の雪上訓練には最適であり、それなりの成果を得た。

この年から新人合宿はSAC合同で行われることになった。

新人合宿を終えてからは、各山岳部に分かれての活動となったが、各地から2時間以上もの時間と費用をかけ松本に来て、新人の指導に当たることは上級生にとって重荷となった。そして、次第に回数が減り続かなくなり、松本の上級生に負担が掛かることになった。この年松本の上級生は7年部員1名、5年部員3名、3年部員1名、留年した2年部員2名であった。

冬山合宿は3パーティーに分かれての南アルプスの全山縦走、春山合宿は昨年度中止になった我部にとって初めての積雪期の剱岳で、奥大日尾根から別山にアタックキャンプを置き、剱岳と立山を往復した。しかし、上級生の薬師岳までの縦走は、メンバーの風邪のため一の越からの途中下山に終わった。

一方、昭和34年度における小林喜芳の構想「奥又白谷総合研究と言う命題を初めて考えるに及んだのである。吾々が奥又白開拓史に名を残す松本高校山岳部の後継たるに適、不適はともかくとして、我等の残滓を拝すにやぶさかならずと思った次第。部の特性を生かして、最大限の努力を尽くして惜しみない命題であることに誰しも異存はあるまい」との想いを繋ぐ「奥又白特集」が提案されたが、実現の運びとならなかった。

昭和42年度は、CL扇能清（3年部員）、5年部員以上6名、4年部員2名、3年部員4名、2年部員8名の構成で、新人は9名、SAC全体で15名の入部があった。教養部統合から2年目を迎え、将来のSAC統合を考えて新人は各部の区別なく扱うことになった。

昭和41年度に入部した部員も進級して全員が農学部に移り、松本には6年部員2名、4年部員1名、他に工学部で留年した2年部員1名が残るだけとなり、松本にいる4年部員井上紀樹を長に各部から選任された7名の新人指導部とリーダー会メンバーが中心となり、他の2～3年部員も加え全員で、分担して新人の指導にあたることとした。

新人は、教養部山岳部として自治会の活動に参加し、また、日常のトレーニングなどは自主的に行っていた。指導部会にあたる一年会を毎週定期的に開き、それに合わせて上級生が出席し、指導と連絡の場とした。

この年、将来のヒマラヤ登山に向けて経験を積もうと、4人のネパール踏査隊が出発した。部内にもヒマラヤが近くなったとの気持ちが広がったが、登山禁止中であったこと、また、大方の部員にとって大した寄与もできずにいて、この踏査隊を自分たちが送り出したと言う気持ちに欠け、興味を持続させることが出来なかった。

しかし、この隊の経験はヒマラヤ登山の可能性を実感させ、後に続くヒマラヤ遠征の大変大きな第一歩となった。

昭和43年度は、CL村田譲治（4年部員）、5年部員以上3名、4年部員4名、3年部員6名、2年部員5名で、新人8名SAC全体で15名の入部であった。

昨年度から続くSACの新人として扱うということに変わりはなく、山行は各山岳部の責任で計画検討され、新人の希望を聞いてSAC委員会で割り振り、実施されていた。

相変わらず新人指導係、リーダー会、SAC委員の上級生が松本に来て、新人の指導に当たって

いたが、SAC 内にそれほど多くの人材もなく兼任していたため、指導体制の主体が曖昧になってしまった。

5 月には、県内の OB と現役の話し合いにおいて、昭和 35 年度遭難の反省と経験が伝達されず、昨年の冬山のアクシデント、秋の長野山岳部の遭難についても、伊那松本としての反省が充分でなく憂慮されていた。以前からの懸案である技術や評価法の成文化の必要性、アクシデントのリストアップ、OB の現役への関り方、要望など具体的に、そして、山岳部員に限ったことではないが、自主性の欠如、団体で登山をする意味、現代の山岳部にとって目標設定の難しさ等に話が及んだ。

昭和 44（1969）年度～ 47（1972）年度について

小根田一郎

まずは昭和 44 ～ 47 年度の範囲での全般的な状況を説明する。

当時、伊那松本山岳部では部員の各年毎の到達目標が概略定められおり、最終到達目標として、冬の穂高の稜線を歩けるようになること、が掲げられていたと記憶している。1 年部員は 2 年部員になるまでに習得すべき体力、技術、判断力等を身に付けるための山行、2 年部員は準リーダー部員の 3 年部員になるまでに習得すべき体力､技術、判断力等を、というように山行が企画され、特に 1 年部員については山行毎に各人の評価がリーダー会にて行われていた。そして、最終的には冬山に参加させられるか否かを基準として評価され、不足していると判断されるとその 1 年部員に対する補充・補強のための強化山行が組まれることになる。このような状況・考え方は昭和 47 年度までの間も同様であった。冬山合宿に参加できない、あるいは、参加しないまま、2 年部員に部歴があがるということは、通常はあり得ないことだった。1 年部員も体力的に厳しいが、特に 2 年部員が自己の体力的なしんどさに加え 1 年部員の面倒も見なければならず一番厳しいものとなっていた。

山岳部の活動である山行の形式として、その性格・内容等の違いに基づく種類分けがなされていた。全員に参加義務が課された「合宿」、これに準ずる「準合宿」、そして準合宿に準じたもので特定範囲の部員を対象にした強化山行あるいは部全体のために必要と考えられる山行であってリーダー会又は上級部員が企画する「部山行」、個々人の志向を追求するために個々人が企画して実行する「個人山行」というものであった。好みにあった山登りの追求という部員個々人からの要請と、山岳部として新入部員から最上級部員に至るまでの指導や経験を積ませるという組織からの要請との調和を図るために必要なものであった。このような種類分けをするという基本概念は武藤一郎を CL とする昭和 44 年度リーダー会により確立されたものと記憶している。そして、このような概念や、活動の比重も年を経るに従いその年のリーダー会により、あるいは、部員の山に対する考え方・部に対する考え方等の変化により、次第に変わっていった。昭和 44 年度には「合宿」「準合宿」「部山行」、昭和 45 年度には概念の曖昧な「準合宿」を廃し「部山行」及び「個人山行」という概念分けを導入し、昭和 46 年度は「部山行」をも廃して「合宿」と「個人山行」との 2 種類とし､昭和 47 年度は昭和 46 年度と同様とし､「合宿」等は必要最低限のものに設定され、個人山行の比重をより増大させたものへと変遷していった｡「合宿」とは例えば昭和 47 年度当時では新人合宿、岩場定着合宿、プレ冬山合宿、冬山合宿の 4 つのことである。前者 3 つは訓練的色彩が強く、後者の冬山は部の総力をあげるという性格のものとされた。もっとも、昭和 44 年度においても昭和 45 年度以降の「個人山行」と同様の山行は数多くなされていた。

上記の合宿等の山行形式についての考え方とし

て、昭和44年度のCLの武藤一郎は当時の種々の計画書の巻頭言等に次のように記している。『今年の方針通り各合宿を、基礎合宿と分散合宿に分けたのだが、今年度はじめてこの5月連休は上級生の為の日頃考えていた山行や山域を実現すべく強化合宿とした。今年度の方針どおり、ある程度のテクニック的な面を基礎合宿で身につけたとしても他の分散合宿でどんな事をやってもいいというのではない。そこで、自分達の計画を部に役立たせ、部員としてのレベルを考えてやっていただきたい』『部で行う山行、一般には合宿と呼んでいるが、その様な山行では各部員それぞれが精一杯努力する事によって成し得るものを求めている。今年の年間方針では、分散合宿にする事をうたい、各部員の力を遺憾なく発揮出来る方向へ持って行こうとした。今年の縦走は北アルプス1パーティー、それが途中で2パーティーに分かれるものと、南ア1パーティー、北海道1パーティーである。すべて合宿として出てこれらの計画は大部分上級生にとっても、下級生にとっても自分達の立場を充分に認識し、各部員が自分達の力を充分発揮しなければならないものである。（中略）この夏山をただ訓練のためでなく、またただ楽しくすごすだけでなく、一つの山行として目指して下さい』

又、昭和45年度CLの笠原敬一の記憶によれば、次のようである。すなわち、『昭和45年度の山行形式は、伊那松本では全員参加の合宿を年3回、新人合宿・夏山定着合宿・プレ冬山合宿と決め、これらは最低限の技術とレベルの習得や、部員間の技術や性格を知り合い確認し合うのが目的で、この合宿がきちんとできて、個人山行、分散合宿が行えると思っていました。もともと合宿は年6回あって、新人・夏の縦走・定着・秋山・冬山・春山で、その内、以前より一部の合宿は、部員数も多いこともあって分散して行っていました。昭和45年度は、夏の縦走合宿・秋山合宿・冬山合宿・春山合宿を個人山行色の強い分散合宿としたと思います。ただ、5月の新人合宿前に行った強化山行は分散合宿だったのか個人山行だったのか、覚えていません。昭和45年度は、このような段階であったと思います。この背景には、昭和42年度の入部者や昭和43年度入部者から残念な退部者が多く、又彼らもその後も登山を続けており、なかにはレベルや意識の非常に高い者も多かったからです。どうしたら大学山岳部をよりよいものに発展できるかずいぶん議論したことを覚えています』

何年部員であるかの「年」は部歴により決まるようになっていた。例えば2年生で新入部員の場合は2年部員であっても山岳部では1年部員となる。これは、山岳部という特殊性により山の経験年数を優先するという考え方が採られていたことによる。又、4年部員を超えて留年し大学に残れば、5年部員、6年部員と部歴が進むことになるが、学生である限り、5年部員になっても8年部員になっても、合宿には当然に参加義務があった。

日常の活動、つまり下界での活動はあまりしなかった。これは他の大学山岳部と違い、山が直ぐそこにあるため、山登り自体を日常のものとして行えたからだと思う。松本の教養部では日常のトレーニング（ランニング等）がトレーニング係を決めて1年部員自身により行われ、週1回の部会が松本部室で行われていた。松本部会には割りと多い頻度で伊那から上級部員が顔を出し、終われば そのまま部室で飲み会に入るというパターンであった。伊那では日常のトレーニングもやった記憶はあるものの、不定期ではなかったかと思う。部会自体は通常通り週1回程度やっていたと記憶している。他に伊那と松本との全体での「総会」を月1回、伊那と松本交互に開いていたと記憶する。最初の新人歓迎コンパ（屋外）で焼き肉と酒の洗礼を受け、新人合宿の準備、新人合宿へと進み、新人合宿が終わって一段落した後、上高地サマテン、夏山縦走、岩場定着合宿で夏休みが終わり、秋山、そしてプレ冬山や冬山合宿、楽しい春山、年度が変わって新人合宿が始まる前の5月連休山行というように、1年部員の1年間はほぼ山

岳部漬けの生活になっていた。

昭和44～47年度は、アンナプルナⅡ峰への海外遠征が計画され実行された年代でもある。昭和44年に計画が具体化し、昭和45年には実行に向けて具体的な準備が行われ、昭和46年に実現した。この海外遠征に佐藤正敏と市野和雄との現役のリーダー部員2名が参加し、又、その佐藤正敏が頂上アタックの帰路に行方不明になるという不幸な結果になったため、後にも触れるが山岳部の活動も大きく影響を受けることになった。

次に年度毎の説明に入る。

昭和44年度のリーダー会は、武藤一郎をCLとし米倉幸夫及び山下泰弘という個性と存在感溢れる4年部員と、3年部員のサブリーダー笠原敬一とで構成された。この年の3年部員には笠原の他に佐藤正敏や井関芳郎がおり、2年部員には市野和雄がいた。そして､1年部員として12名(SAC全体では20名弱）が入部した。もっとも、1年部員は新人合宿、夏山縦走、そして、秋山の強化山行を経るに従い減少し、冬山前の段階で落ち着き、6名が残った。大体は1年の冬山に参加したものが最終的な在部者になる傾向にあった。昭和44年度は、2年部員が1名のみであり数的に多い1年部員の面倒を見るには手薄であるかに見えるかも知れないが、3年部員や4年部員の質的に重みのある上級部員により意欲的な数多くの山行がなされ、1年部員に体力・技術を超える経験に基づく精神的な成長をもたらせたのではないかと考えられる。

昭和45年度のリーダー会は、笠原敬一をCLとし佐藤正敏及び井関芳郎という4年部員と、3年部員のサブリーダー市野和雄とで構成された。2年部員としては、三坂健次（現三坂岳応)、大安徹雄、鳥越洋一、福田渉、森茂、小根田一郎の6名が存在感を示すに至っていた。そして、1年部員としては13名（SAC全体では20名程度）が入部し、この年度が終わる頃でも10名残っていた。この昭和45年度はアンナプルナⅡ峰海外遠征への準備作業に現役部員が駆り出されることも多かった上に、笠原敬一の交通事故により、佐藤正敏へのCL途中交代、さらには年度終盤にその佐藤及びサブリーダーの市野和雄の海外遠征参加、というように、変化の多い年だった。すなわち、昭和45年リーダー会は当初の構成から、秋の交通事故で長期入院となった笠原敬一に代わり佐藤正敏がCLに就任し、サブリーダー市野和雄となり、さらに、その両名が海外遠征参加で抜けて、終盤にはCLに就任した井関の1名のみの構成という事態に至った。又、安定的な人数の2年部員の内、福田渉と森茂の両名がロシア経由でヨーロッパに入り、バイクで中近東を経てネパールまでという計画を実現させるために、昭和45年冬前に休部し活動から離れた。かかる状況下ではあったが、この昭和45年も充実した山行がなされ、より安定的な人数が残った1年部員も、2年部員と共に、これから先の山岳部の充実が期待される程度まで大きく成長できたと考えられる。

昭和46年度のリーダー会は、本来の4年部員の市野和雄がアンプルナⅡ峰海外遠征に参加で不在であるため、3年部員の三坂健次をCLとし大安徹雄、鳥越洋一、小根田一郎の3年部員のみで構成された。この年の2年部員には、臼井武、川口隆、金野美登志、高橋雄治、中田茂、三井和夫、渡部光則の6名がいた。そして、1年部員として9名（SAC全体では16名）が入部し、この年が終わる頃には5名に落ち着いた。活動を開始した始めの段階で海外遠征に参加していた佐藤正敏の遭難が伝わり、精神的な沈滞はあったものの、山岳部活動は続けられた。秋になってCL三坂健次が腰痛発生で活動を離れた。

そして、冬山合宿の準備をしている最中に、アンナプルナⅡ峰の遭難以外にも長野県関係の海外遠征隊で死者が出たことで、長野県山岳協会から冬山自粛の要請が出された。議論の末、全く中止すると大学山岳部の継続のための「経験」が不足することから、当初予定の冬山合宿は中止するものの、時期を遅らせて冬山訓練合宿を行うことにした。

昭和47（1972）年度のリーダー会は、小根田一郎をCLとし三坂健次及び大安徹雄という4年部員と、サブリーダーとなった3年部員の川口隆とで構成され、本来のリーダー会の姿に戻った。3年部員には、サブリーダーの川口隆の他に、臼井武、高橋雄治、中田茂、三井和夫、渡部光則がいた。この年の2年部員には、鈴木忠、棚橋秀顕、服部幸雄（現小松幸雄）、西部孝明の4名がいた。そして、1年部員として9名（SAC全体では15名）が入部し、この年が終わる頃には福島渉、牧瀬敏裕、吉田秀樹の3名が残った。次代を担う3年部員を始めとして個人山行志向が大きな流れとして定着してきており、前年度の抑制気味だった山行許可基準を改め、積極的に許可して各人の思いを実践してもらう一方、リーダー会からの注文も積極的に付けるという方針で運営した。その結果、数多くの計画書の提出がありリーダー会は繁忙を極めた。

昭和48（1973）年度～53（1978）年度（信州大学山岳会統一まで）について

師田信人

伊那松本山岳部の発足以降、いわゆる信州大学山岳会として全学合同の単一組織に移行した昭和54年までの、最後の章となる昭和48年度～53年度を担当することとなった。在学していたのが昭和49年から昭和56年であるが、山岳会員として活動的な時期を過ごしたのは昭和52年までであり、昭和53年はヒマラヤ遠征で1年間をほぼ潰し、以後は単発的に合宿、岩登りを中心とした個人山行に参加していただけであり、この最終章を書くのは荷が過ぎると考えた。とりわけ、入部前年の昭和48年冬山におけるオール信大の剱岳北方稜線の経験がない自分としては身に余る重責と考え辞退したが、妥協のない断固たる編集長の指令のもと、非才を顧みず筆を執ることとなった。とはいえ当時山岳会内部であれほど熱く話し合った部のあり方、山行のあり方、自分なりの山のあり方、といった時に激論を交わした情熱の記憶は忘却の彼方に流れ、思い返す術もない。そこで、ここでは各年代の山行を振り返りつつ、個人論としての当時の伊那松本山岳部の歩み・雰囲気を中心にまとめることにした。本来、一番大切な組織論としての山岳部の歩みは、昭和48年以前の各先輩の記録の足下にも及ばない不完全なものとなっていることを容赦していただきたい。

昭和49年当時の伊那松本山岳部の状況をみてみると、昭和48年度の冬期剱岳北方稜線を踏破した4年部員がほぼ全容を保ったまま5年目に突入していたものの、4年部員はリーダーの服部幸雄（現小松幸雄）1名、3年部員3名、2年部員4名であり、松本地区の上級生は3年部員の吉田と2年部員の1名のみ、その2年部員の上級生も新人合宿後に退部し、上級生不足は切実な問題だった。上級生の絶対数の不足は岩トレなどに著明に現れ、岩トレに行くのは岩登り志向の強い特定のメンバーが中心となっていった。このような状況で、当初15名以上入部（新人合宿に10名以上の新人が参加したのは昭和47年が最後と思う）した同期も2年目の冬山に入山したのは4名となっていった。

各年度の山行を簡潔に振り返ってみる。

昭和48年度は、4年部員が6名、実質的に活動できたのは4名であるが質量とも現在に至るまで、傑出した学年がリーダー部員として揃っていたといえる。山行も活発であり、夏の剱岳定着合宿（真砂沢BC）、富士山でのプレ冬山合宿をへてオール信大での厳冬期剱岳北方稜線の中心となって成功に導いている。

昭和49年度は、前年度の反動か4年目が服部1名のみであり、10名を超える新入部員を前に部の運営に苦労した年と思われる。SAC新人合宿では17名の新人（うち、伊那松本所属15名）を5パーティーに分けて入山した。夏の剱岳定着は

前年同様真砂沢BCで行ない、八ツ峰・源次郎尾根を中心に、新人は八ツ峰6峰の岩場を、上級生は主にチンネ登攀を行なった。冬合宿は本隊が唐沢岳西尾根から奥穂高岳、上級生は前穂高岳北尾根から奥穂高岳で本隊と合流するもので、当時の部員の構成を考えると1年部員7名を抱えてよくできたと思う。新人の身で奥穂高岳に冬期登頂できたことと、3年目部員が体調を崩し急遽下山となった時の機敏な上級生の対応が非常に印象に残った山行になった。この頃より、ヒマラヤトレッキングから帰ってきた上級生部員を中心に、ヒマラヤ研究会が開かれるようになり、実感はわかないもののヒマラヤの話が身近なものになってきた。

昭和50年度は、4年部員のCL吉田秀樹、SL福島渉となり、個人山行を中心として屏風岩など岩登りへの取り組みが再び盛り上がり始めた時期である。夏の岩場定着合宿は昭和46年以来の奥又白となり、穂高岳の岩場、雪渓を堪能した。しかし、剱岳に較べるとどうしても山の奥行きの深さに限界を感じたことも事実であり、以後の夏合宿はほぼ剱岳になりこれが最後の奥又白合宿になったと思う。冬合宿は朝日岳から白馬岳の北方稜線を辿るものであったが、白馬岳手前の稜線で半数以上が強風のため顔面に凍傷を負った。この年の秋に厩所立岩での岩トレ中に1年部員の清川雅夫が転落し、生命は取り留めたものの重度の頭部外傷を負い結局中退せざるを得なくなった。秋の個人山行は中止となり、全員交代で大学病院の病棟に詰め意識の回復を待った。受傷から3ヶ月近くになった12月初めのプレ冬山合宿出発時はまだ昏睡状態だったのが、帰松後に全員で病棟を訪れると開眼して反応するようになっており大きな驚きだった。清川の事故の受け止め方は様々だったと思うがそれなりに総括され、報告書も出した。部としての岩登りへの志向が後退することはなかったが、その危険性を身をもって警告してくれたものと思っている。個人的には、その時の経験が脳神経外科医になる一つのきっかけになったこともあり、今でも忘れられない事故である。

昭和51年度は、CL須貝与志明、SL古橋孝夫の伊那コンビが4年部員となって部を引っ張っていった。個性的な両者の性格も反映され、岩･沢･縦走と活発な活動が夏冬問わず繰り広げられた。長野部員と組んでの山行も、飛躍的に増えた年であった。夏合宿は再び剱岳に戻り、真砂沢BCで行なった。冬合宿では心配していた奥大日尾根の雪庇は難なく突破し、別山尾根から剱岳アタックを2回に分けて上級生で行なった。快晴のもとに出かけた第1次隊は余裕で明るいうちに戻ってきたが、翌日の第2次隊は中途から吹雪となり、風雪の剱岳山頂からの下降路に迷い東大谷側に入り込むこと3回、その度に山頂に登り直し這々の体で剱山荘冬期小屋に戻ってきた。翌日は室堂経由富山まで行って祝杯をあげる予定が、室堂の雪原に一歩入ったとたんトップの姿が視界から消えた。結局頭までもぐるような深雪をダブルラッセル（二人空身で）で、大の男11名が全力を使い果たして丸一日で1.2km進んだだけで日が暮れた。テントの中で、誰も声なく意気消沈して寝入ったことが忘れられない。

昭和52年度は、CL師田信人、SL二俣勇司が中心となったが、長野部員との合同山行が増えたことも反映して、実質的にはこの二人に長野の山本章も加えた3人で山岳会運営の舵取りを行なっていた。伊那松本の夏の剱岳合宿はこの年初めて長次郎雪渓上部にある熊の岩で行ない、長野上田山岳部とテントを並べて行なうことになった。この夏合宿では、意図的に岩登りの数・質をあげることに留意し、またそれに応えるだけの人材も揃っていた。具体的にはこれまでの合宿であまりトレースすることのなかった池の谷、小窓尾根側壁、源次郎尾根平蔵谷側フェース、他にも東大谷コマクサルンゼなどに登攀パーティーを送り、ほぼ目的を達成した。冬山合宿のオール信大による厳冬期黒部横断は、ここ数年の長野上田との協力体制、上級生の力量もあり計画段階から大きな支障もなく無事達成することができた。個人山行

も単に岩登りというのでなく、古典的な壁のより困難なルートを志向したり、新たに開拓された山域の未知の壁に向かうなど、個人の力量と好みに応じた山行が自由活発に計画された時期でもあった。

昭和53年度は、CL下田章、SL片山博彦が中心となり、前年度に引き続き伊那松本の中心部員として活躍した。ヒマラヤ遠征の影響を受け、上級生部員不足、又秋は現役からも2名参加となにかと苦労が絶えなかったと思うが頑張って会を引っ張ってくれた。冬合宿は笠ガ岳から槍ケ岳であり、緊張しつつも充実した冬の縦走を楽しく遂行することができた思いがある。当時、3年部員は伊那松本も長野上田も1名づつであり、長野部員の減少という現実をきっかけに、従来の両者を隔てていた敷居が低くなっていたことも相俟って信大山岳会への統一の機運が進んでいったのだろうと考えている。

伊那松本山岳部の方向性、あるいは個人的組織論

新人として入部した昭和49年当時の伊那松本山岳部の雰囲気は、よく言えばオーソドックス、逆の言い方では古典的な山登りが中心となっている印象だった。今、思い返せば、そこにはおそらくアンナプルナでの佐藤さんの遭難が目に見えない影となって上級生部員に尾を曳き、また前年度の剱岳北方稜線をオール信大で達成した反動としての長野に対する独自色を出す必要、および上級生の数が限られたところに新人10名以上という現実的な問題が絡んでいたのだと思う。

当時の山岳界は、山岳同志会が毎年のように遭難者を出しながらも画期的なルート開拓・登攀記録を国内外で達成し、岡山クライマーズクラブも難ルートを次々と開拓・登攀していく、その一方で長谷川恒男が組織と対局の単独厳冬期ヨーロッパアルプス3大北壁登攀して話題を席巻していた。海外でもメスナーの活躍に代表されるように、個人を中心にアルパインスタイルによるより困難な未踏の岩壁登攀、いわゆるBig Wall Climbingがヒマラヤ、アルプスを問わず話題の中心になっていた。

そのような社会的潮流の中で、上級生の中だけでなく新入部員の一部にもより困難な登攀に魅かれる部員は当然存在した。しかし、当時の部の雰囲気は、あくまで岩登りは冬の稜線歩きに必要な技術と位置づけられた以上のものではなく、岩登りのための岩登りは伊那松本の山登りではない、とする風潮に叛旗をあげられるようなものではなかった。記憶に間違えがなければ、昭和49年時点の現役部員で屏風岩登攀経験のある上級生はいなかったと思う。個人的には、1年目の新人合宿直後に2年部員の上級生が退部し、松本の社会人山岳会に岩登りをやるために入会したことが、当時の部の雰囲気を表す象徴的な出来事として今でも覚えている。今だからこそ明かせるが、実は1年目の冬にリーダー会に内緒で長谷川恒男が、笛吹川西沢渓谷で開催した氷壁登攀の講習会に参加したことがある。当時の伊那松本山岳部の状況では技術習得できないのではないかと勝手に危惧しての行動であったが、ことの是非は別としてそれだけ切実に感じていたことは事実である。

オール信大での剱岳北方稜線の偉業は上級生から繰り返し話を聞かされ、いつか自分が在籍中に再度オール信大でしかできない山行に取り組んでみたい、という気持ちを育んだ。これはその後、厳冬期黒部横断として実を結んだ。一方、岩への志向は表立って口には出せないものの、自分たちが上級生になった時にはもっと自由かつ活発に困難な登攀に挑戦できるような雰囲気にしたいと心の中に秘めていた。実際に、自分がリーダー部員になった時にはそれなりの結果が出せたと思うが、これは大学山岳部故の新陳代謝の早さと、内部ではいろいろあったものの昭和50年度、昭和51年度のリーダー部員の努力の結果と思っている。

ところで、信州大学山岳会の岩登りの歴史を紐解いてみると、古くは明神岳五峰赤壁の信大ルート開拓に始まり、前穂高岳におけるDフェース信大ルート開拓、前穂岳第一尾根アルファールン

ゼ奥壁等の初登攀は、伊那松本山岳部によって達成されている。このような風潮がいつの頃からか失われ、僕らが入部した頃のような岩登りに対する厳しい見方が生まれてきたのかはわからない。大学山岳部故に、事故を起こしては行けないということも大きな足枷になっていたのだろうとは思う。前述したように、当時は長野山岳部が西川義満のもとに意欲的な岩壁登攀を行なっており、なんとかしなければ、という気持ちが強かった。また、夏の上高地サマーテントではかつての先鋭部員だった中堅OBから、穂高でのルート開拓にまつわる武勇伝をさんざん聞かされ心が躍る反面、その伝統がどこで途切れたのか忸怩たる思いをしていた（話がそれるが、サマーテントでのOBの話というのは、一種の伝統継承の役も果たしていたように思う）。前穂穂高岳茶ビン尾根をかつて断念した話を聞いたのが元になって、昭和54年2月に2年部員の加藤喜章と組んでの登攀（1週間の遅れで厳冬期第3登となった）に繋がり、その後の前穂高岳第一尾根登攀、更に下降中の明神岳東稜での九死に一生を得た滑落事故を経験して、師田個人の人生観が変わることになった。

幸い、年度が替わる毎に徐々に岩登りへのリーダー会の姿勢も変化し、また山岳会全体での部員数の減少に伴い各山岳部間の横の交流が自由活発になってきたこともいい影響を与えたと思う。2年目の夏に、西川義満と前穂高岳右岩稜を登攀したことは忘れられない想い出となっている。ひとたび変化が現れると、後はそれまで貯めていたエネルギーが堰を切ったごとくに奔しり、数年のうちに上級生が屏風岩を登るのは当たり前、更に困難な登攀を目指すものは奥鐘山西壁、丸山東壁、唐沢岳幕岩、あるいは甲斐駒ケ岳周辺の岩壁へと穂高・剱以外のバリエーションルートにも次々に繰り出していった。冬の穂高岳での連続登攀なども行なわれ長野部員と組んでの山行も一般化した。昭和40年代後半は、そういった意味では従来のオールラウンドな山行に加え、岩への志向も高まった、非常に充実した質の高い山行を行なっていた時期であり、それは全学の信大山岳会に統一された後も引き継がれていったと言える。

当時のリーダー会のメンバーをみると、面白いことに必ず片方にオールラウンドな山行志向が強い者がいると同時に岩志向の強いリーダー部員がもう片方にいる、という構成が続いた。また、各人一つに固まるのでなく、岩を中心に沢もやったり、オールラウンドな山行中心としつつも岩定着のリーダーも居たりという状況だった。知床や黒部のような、山頂を目指さない独創的な山行はこういった素地のもとに生まれてきたと思うし、厳冬期黒部横断を成功裡に終えることができたのもこのような底力があったからだと思う。もう一つ、個人的な観察を加えさせてもらうと、岩志向が強かった人間は比較的卒業後山とはすっぱり縁を切ってしまい、逆にオールラウンド志向の部員の方が静かに山に燃えていくのが多かったように思う。師田の周辺で言えば、吉田秀樹、中嶋岳志は別格として、福島渉、二俣勇司、そして現在も活躍中の田辺治、皆現役時代はガンガン岩を登るような人間ではなかった。その中から2名の遭難者を出すということは、結局山の危険というのは初期の技術的な事故は別として、後は結局確率の問題にすぎないということを示唆しているように思える。

統　　合

信州大学は戦後、新制の総合大学として発足しながら、その実は学部が長野、上田、松本、伊那の各地に散在しているために、総合大学としての機能を果たしているか、という疑問を誰でもが感じているのではないか。この地域的欠陥が信大内部の諸分野に、色々と現れている問題の根源的なものの一つであるように思える。それは山岳部にも当てはまり、本来ならば一つの大学の山岳部として一つであるべきものが、いくつかに分かれているのも根本的には信大そのものの地域性に起因している。信州大学山岳会（以下「SAC」）はこうした地域的欠陥を少しでも補う為に結成されたものである。

SAC の萌芽は、昭和 30（1955）年頃から始まった。「報告 No.1」の中の「松本山岳部が生まれるまで」の項で矢野想之輔氏は、医学部山岳部と文理学部山岳部が統合を検討しているときに、教育学部山岳部 OB の百瀬斐敏氏から、「この際、教育学部山岳部、工学部山岳部も入れた信大山岳部を作ったら如何との意見を受けた」と述べている。

昭和 35（1960）年度（SAC 結成）～昭和 40（1965）年度の動きについて

故 小川　勝

昭和 35 年 4 月、各山岳部の連合機関として、大学本部厚生課の肝いりで SAC が結成された。その運営機関として、各学部より 2 名選出された学生委員による委員会が年 2 回（4 月、10 月）もたれることとなった。当時の信大の各山岳部は松本山岳部（文理、医学部）、松本分校山岳部（教育）、長野山岳部（教育、工学部）、農学部山岳部（伊那）、繊維山岳部（上田）の 5 つに分かれていた。

これらの山岳部は SAC が結成されたのを機会に、初顔会わせとして合同の新人合宿（4 月 29 日～ 5 月 5 日）を持とうと話し合いがなされた。こうして総勢 70 名余の大部隊が徳本峠を越えて、上高地小梨平に BC を設営した。この合宿について、当時の関係者の反省・意見は下記のとおりであった。

『島々宿まで大型バスの貸切を使い、50 人用の八錐型を含めてズラズラッと天幕を張り巡らせ、厚生省とニラミ合い迄やった大合宿のわりには効果の薄い結果に終わった。あれから 2 年近くになっても、どの学部からも「もう一回あれをやりましょう」とは言い出さないところをみれば、「あんな大所帯じゃ、やりきれん」と言うのが本音ではなかろうか。事実、毎日の行動予定は前夜のリーダー会で全員の個々に渉って検討されたうえ、数少ないリーダーを付けてパーテイが組まれ、亦その日の個々の行動報告をリーダーから聞いて、次の日の行動を決める方法を摂った。この方法については SNAC あたりから繁雑である、合宿前に計画が決定されるべきであったとか批判があったらしいが、事前に何等具体的な行動も決め様のない程の多様なカラーを持った部が突然行動を共にすることになったのだし、夫々の部別に行動したんでは顔合わせの意味が少ないから混合してやることにした。一つの命令系統に沿ってやれば簡単だが、角が立っても面白くないとなれば、合議制で不満を解消するより外に方法がなかった。とにかく毎夜 2 ～ 3 時間のリーダー会じゃ疲労も重なると言うもの。それでも事故一つない一応の目的を達した第一回合宿だった。各部のカラーも夫々触れることが出来たし、烏合の衆では何一つまとまった山行になりそうもないこともわかった。今後の SAC としては永い眼で育てるべく相互理解を基調に、交流を続ける中で、一緒に山行出来る重点を見出す努力が必要と思われる』（小林喜芳、